

大東文化歴史資料館だより

第14号 2013. 5. 31

大東文化学院時代の中国旅行記（一）

歴史資料館運営委員・中国学科准教授 吉田 篤志

私の手許に、大東文化学院時代の中国への修学旅行の記録が二冊存する。一冊は表紙に「大東文化学院第壹回支那大陸旅行記」（以下、第一回旅行記と言う）と題し、背表紙は未記入で、孔版袋綴182頁（目次を除く）で、奥付が無く発行年が定かではない。もう一冊は表紙・背表紙に「燕呉遊蹤第二回支那大陸旅行記」（以下、第二回旅行記と言う）と題し、表紙・背表紙・奥付に発行元を「大東文化学院」とし、活字印刷400頁ほどで、奥付に編輯兼発行者を川又武とし、発行年は昭和6年（1931）7月5日とある。口絵に大津淳一郎総長の題字・細田謙蔵団長の題字・曲阜衍聖公府と天津離宮における集合写真・燕呉紀游略図等を載せ、次いで大津総長と細田団長の序文が載る。川又氏の「編輯後記」の日付は昭和6年6月で、「昨夏暑中休暇を利用して支那の南北を駆け巡った。……」とあるから、第二回旅行は昭和5年（1930）の夏に実施したことが分かる。

第一回旅行の実施年を記すものは、第二回旅行記に載る渡部實一の「曲阜（附録：第一回旅行記より曲阜泰山の記事を抄録）」の「後記」に「昭和四年第一回大陸旅行を舉行し、史蹟を探るや其の主眼を孔廟に置く。……」とあり、また第二回旅行記に載る小林清八郎の「泰山と廬山」の後に山田生なる者の「泰山について」と題する旅行案内を附録として載せ、その後書に「昨夏七月、將に禹域に遊ばんとして、登岱の効を全うすべく應急の調査をしたのが、此の篇であった。……」とあり、昭和4年（1929）の夏に実施したことが分かる。また第一回旅行記の最後に載る旅行団長峰間信吉教授の「感謝の辭」に「本年は我外務省文化事業の高誼に浴し、多額の旅費を補給せられて、此の本学院第一回支那大陸旅行團の派遣を見る事になったのである。……」とあり、旅行は外務省の補助金により実施したことが分かる。

第二回旅行記の前編凡例に「第二回旅行にありては、戦亂の故を以て山左の聖蹟を巡禮すること能はざりしを以て、特に後篇曲阜に附するに第一回旅行記を以てせり」（第二回旅行記に掲載の「曲阜」や「附録」の曲阜泰山の記事の抄録、また執筆者の「渡部實一」の名は、第一回旅行記には無く、第一回旅行のメンバーにも渡部の名は無い）とあり、また後編凡例に「第一編凡例に於て述べたる理由により、廬山と泰山の篇を缺きたるを以て、特に第一回旅行に於て發表せられたる小林君の論文を掲げて、その缺を補はんとす」（第二回旅行記に掲載の「泰山と廬山」、また執筆者の「小林清八



郎」の名は、第一回旅行記には「角田清八郎」の「鴻爪録」として掲載する。また附録の山田生執筆の旅行案内「泰山について」は、第一回旅行記には見当たらないとあることから察すれば、当時の済南・曲阜方面、或いは長江流域の九江（廬山）・武漢方面は「戦亂」による危険地域であったことが分かる。この「戦亂」とは昭和2年（1927）に起きた漢口事件や翌3年（1928）に起きた済南事件等のことで、漢口事件は湖北省漢口の日本租界の日本人に対する中国人の略奪暴行事件であり、済南事件は山東省済南で北伐中の国民革命軍（蒋介石）と済南に出兵した日本軍との間に起きた武力衝突事件である。

これらの事件の本を正せば、明治初期からの日本の掲げたスローガン「脱亜入欧」や「富国強兵」による中国大陸への進出や、明治28年（1895）日清戦争の勝利による日本・日本人の優位性と中国・中国人に対する蔑視感に起因し、更には大正4年（1915）にドイツが有していた山東省の権益を日本に譲り渡すことなどを記した「対華21ヶ条要求」やその後の中国軍閥と日本との癒着に対し、中国の学生を中心に反日運動が起こり、大正8年（1919）5月4日に起きた五四運動へと発展していく。漢口事件や済南事件もこの反日運動が原因しているものと推測できる。その証拠に、第二回旅行記の「旅行日記」（執筆者：川又武・濱中清）の8月8日条下に、青島上陸に際し、埠頭の正面の建物に「廢除一切不平等條約」「打倒一切國際帝國主義」「實現三民主義」「實成國民革命」「中國國民黨青島特別市黨務委員指導宣傳部」等と、国民党のスローガンを大書していたことを記す。この事件の後にも昭和6年（1931）の満州事変や昭和7年（1932）の第一次上海事変等が立て続けに起き、日本と中国との険悪な状態がエスカレートしていく。

第一回旅行は漢口事件・済南事件直後の昭和4年（1929）に実施しているので、事件後の緊迫した状況が依然残っていたであろう。そのことは第一回旅行記の「旅行日誌」8月4日条下、漢口を船で出発する際に「出発前警備艦矢矧より兵士来りて、船内使用人の點檢、乗客数の調査、警備の手配等をなす。漢口より上流の航路は漸く危険地帯に入るを以てなりと云ふ。……」とあることから察せられる。また「旅行日誌」8月21日条下、天津駅に到着の際に「驛前の駐津日本憲兵分隊派遣所に憩ふ」とあり、北京に到着の際も「腕車日本駐屯軍兵舎に至る」とあり、「旅行日誌」を見る限り、行く先々で日本の軍隊や警察に守られ、日本総領事・日本商務官・警察署長等の注意や談話を聞き、現地の状況や国民党・共産党・軍閥・匪賊等の情報を把握しながらの旅行であったことが分かる。第二回旅行も同様に緊迫した状況における旅行であったことは、「旅行日記」（執筆者：川又武・濱中清）から窺うことができ、北平（北京）における8月27日条下に「時方さに南北軍交戦中なりしかば、南軍の飛機二臺、北平の上空に來り、北海公園附近、及び汪精衛兆銘の邸宅附近に、爆彈十數個を投下せり。北軍は之を撃退せんとて、盛んに砲火を交へたり。……」とあるがごときである。

<資料寄贈ご協力のお願い>

大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）では、学園に関わる資料を広く収集しています。教科書・講義ノートのほか、写真・映像、機関紙・新聞など、ご提供いただけるものや情報がありましたら、お気軽にご連絡ください。ご協力を宜しくお願いいたします。

大東アーカイブス 第14回 企画展

大東の周年記念事業 — 10周年から80周年までを振り返る —

展示期間：平成25年6月17日(月)～平成25年9月30日(月)

(開室時間 毎週月～金曜日 9:00～17:00)

展示場所：大東文化歴史資料館 展示室(板橋校舎2号館1階)

本年度、2013(平成25)年9月20日、本学は創立90周年を迎えます。

1923(大正12)年9月20日に大東文化学院の設立認可を受けて以降、これまで、10年の節目には必ず記念式典や周年行事、記念事業、出版刊行等が行われてきました。

本学の目指す基本理念は変わらなくとも、各時代で学園の状況は大きく異なります。新学部の設置や学部学科の再編、新たな校地への移転や新校舎研究棟などの建築、キャンパス・グラウンドの再開発に至るまで、周年記念事業を機として学内環境の整備が行われることも、よくあることでした。

これまでの周年記念事業を振り返ると、そこには各時代に目指していた、大東文化学園発展への展望が見えてきます。

今回の企画展では、刊行された記念出版物を中心に、過去の記念式典やその準備過程の事務記録綴等も併せて展示し、ご覧いただくことにしました。



* 所蔵資料紹介 * 2012年度受贈資料から

『東京文政大学 図書目録』

2012年度に板橋図書課より学内移管され、歴史資料館所蔵となった『東京文政大学・図書目録』。

敗戦後、1949(昭和24)年度より新制大学が実施され、大東文化学院専門学校も新制大学へ昇格することとなります。ただし、そのためには校名変更が必須条件でした。「大東文化」は、戦時下の政治色が強いように見られたためです。苦慮の末に決定された校名が、「東京文政大学」でした。

「東京文政大学」は、1951(昭和26)年には「文政大学」と改称され、同窓生や関係者の強い希望によって1953(昭和28)年からは「大東文化大学」へ復することとなりました。結果として、「東京文政大学」としても「文政大学」

としても卒業生を送り出すことは一度もなく、大学一期生の卒業証には「大東文化大学」と記されました。そのため、「東京文政大学」は幻の校名と呼ばれるようにもなりました。

さて、実質的に2年足らずの間しか存在することのなかった「東京文政大学」の、『図書目録』の綴りが板橋図書館の倉庫内に保管されていました。1945(昭和20)年4月の空襲により校舎が罹災し、図書もほとんどすべて焼けて失ってしまっ後、新制大学として再出発するために必要な図書を一から集め、一冊ずつ書店や個人から購入していった記録が残されています。やはり漢籍の所蔵比率が高いものの、経済学、法学、教育学関連のものなども多く見られます。



(歴史資料館運営委員 浅沼薫奈)

・・・兵頭徹教授を悼む・・・

今年3月25日、歴史資料館運営委員である兵頭徹先生がご逝去されました。突然の悲報でした。

先生は、大東文化大学の「生き字引」と呼ぶことのできる貴重なお一人でした。大東文化大学経済学部の卒業生であり、大学院修了後も学内に残られ、東洋研究所に所属されながら日本近現代経済史を専門としてご研究されつつ、長く教壇に立たれてきました。学生時代から数えると、先生の「大東歴」は40年以上になります。

大東にアーカイブスを創ろう。そんな呼びかけに二つ返事で応えられた先生は、2006（平成18）年度の大東アーカイブスの立ち上げ以降、歴史資料館の活動に心血を注ぎ、尽力されてきました。

ニコニコ顔で、誰に対しても腰が低く、だけども少し頑固なところがある先生でした。お酒が大好きで若いころはそれで失敗もしたようでしたが、私が初めてお会いした頃の先生はすでに酒量も心得ていて、いつも美味しく楽しいお酒を飲んでいらっしゃいました。

定年を数年後に控え、東洋研究所でのご自身の研究もまとまりつつあるなか、2012（平成24）年度より年史編纂の仕事に集中するため、自ら願い出て歴史資料館へ出向されました。何より、大学アーカイブスという組織に、専任研究者（教員）を配置することの重要性を訴えるためのご決断でした。

2012年度の最後の1年間は、兵頭先生と私の、教員2人きりの特殊な部署ではありましたが、新たに大海へ漕ぎ出でたような気持で、これからの大東アーカイブスの活動や年史編纂の方針などについて、毎日のように何でも何度でも話し合ってきました。だから、先生の死は個人の死にとどまらず、大東の歴史を紡ぐ歯車の一部が欠けてしまったようなもので、大東アーカイブスの土台石が崩壊してしまうことにもなりかねません。

生前、「他の大学から何度か誘われたことがあったけど、大東から出て行こうかと迷ったことは一度もなかった」ときっぱり仰っていたのが印象的でした。「大東人」としての先生の精神を、大東文化の歴史の一つとして受け継いでいかねばと思います。

（歴史資料館運営委員・特任講師 浅沼薫奈）

【大東アーカイブス活動記録】（2012年10月～2013年3月）

- | | |
|---|--|
| 10. 1 学務課より資料移管 | 12. 20 河田泰弘氏より資料受贈 |
| 10. 10 全国大学史資料協議会・全国総会研究会参加
（於：同志社大学） | 総務課より資料移管 |
| 10. 11 宮崎健司氏（本学同窓生）より資料受贈 | 1. 7 水島大二氏（本学同窓生）より資料受贈 |
| 10. 17 歴史資料館運営委員会会議 | 1. 19 上原稔生氏（本学同窓生）より資料受贈 |
| 10. 22 平沼駿一郎書軸、頭山満書額を入手 | 1. 23 歴史資料館合同部会会議 |
| 10. 30 第13回企画展「卒業アルバムに見る学生生活」公開 | 1. 24 全国大学史資料行議会東日本部会幹事会・研究会参加
（於：専修大学） |
| 11. 10 板橋図書課より資料移管 | 2. 13 栗原健成氏より資料受贈 |
| 11. 27 総務課より資料移管 | 3. 8 歴史資料館運営委員会会議 |
| 12. 10 ニューズレター「大東文化歴史資料館だより」vol.13発行 | 3. 14 全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会参加
（於：明治大学） |
| 12. 13 全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会参加
（於：東海大学） | |